

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：25201

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K19607

研究課題名（和文）他害行為によって隔離となった患者の安楽に向けた看護ケアの定義と実践

研究課題名（英文）Definition and practice of nursing care for the comfort of patients seclusion due to acts harmful to others

研究代表者

日野 雅洋（HINO, MASAHIRO）

島根県立大学・看護栄養学部・助教

研究者番号：20760482

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、精神科病棟において他害行為を理由として隔離となった患者の安楽に向けた看護を解明し、実践事例集を作成することを目的に行った。  
具体的には、隔離中の看護の現状を文献レビューによって示し、隔離直後、また、隔離から長い期間が経った方へのインタビューによって、隔離の影響を明らかにした。  
これらの研究によって、患者の安楽に向けた看護においては、隔離に対する患者の思いや認識を表出してもらうことが足がかりになると考えられた。本研究で得られた患者の語りを活用し、看護のあり方を示した実践事例集を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

精神科病棟で隔離となった患者への看護のあり方は、行動制限最小化に向けたものが多くある一方、安楽に向けた看護は明らかになっていない。本研究の成果によって、隔離中の患者への看護のあり方への新たな視点を導くことができた。また、患者の体験を語りによって明らかにすることができたことから、隔離となった患者の看護を検討する上での波及性のある基礎資料に位置付けることができた。  
特に患者の思いや認識に価値をもつ看護の必要性が示されたことから、隔離となった患者への看護の発展が期待できるものである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify nursing care aimed at the comfort of patients who have been seclusion in psychiatric wards due to harmful behavior, and to compile a collection of practical case studies.

Specifically, a literature review was conducted to show the current state of nursing during seclusion, and the effects of seclusion were clarified through interviews with patients who had been seclusion immediately after and those who had been seclusion for a long time.

These studies suggested that getting patients to express their feelings and perceptions about seclusion would be a starting point for nursing aimed at patient comfort. Utilizing the patients' stories obtained in this study, a collection of practical case studies was created that shows how nursing should be provided.

研究分野：精神看護学

キーワード：看護 安楽 精神科 隔離 他害行為

### 1. 研究開始当初の背景

精神科病棟での隔離処遇は倫理的にも退院後の患者の社会参加のためにも課題が多く、特に他害行為によって隔離となった場合は、長期の隔離処遇となる傾向がある。隔離を早期に解除するための看護等の方策については活発に検討、実施されており、行動制限最小化委員会の設置はその一つである。この委員会では、隔離や身体拘束の必要性和妥当性についての検討と共に、その実施が少なくなるように講演会などの取り組みがなされている。また、院外での研修会も盛んにおこなわれている。

しかし、そのような研修を行った後に、一旦は隔離や身体拘束が減少するものの長期的に大きな変化はない。さらに近年は隔離や身体拘束となる患者数が増加しており、隔離や身体拘束の実施時間をフィンランドと比較するとその4倍とされている。行動制限を最小化するための取り組みは効果が限定的である中、隔離中の患者の安楽に向けた看護については、着目されていない。隔離中の患者の安楽に向けた看護ケアを考えることで、精神科における特に隔離を受けた患者への看護のあり方へについての新たな方策を導けると考えた。そして、これによって、隔離となった患者への看護を検討する上での波及性のある基礎資料になると考え、本研究に取り組んだ。

### 2. 研究の目的

本研究は、精神科病棟において他害行為を理由として隔離となった患者の安楽に向けた看護を解明し、実践事例集を作成することを目的としている。

(具体的目標)

- 研究1) 患者の隔離中の看護の現状を国内外の研究論文を用いて文献レビューを行い明らかにする。
- 研究2) 隔離解除直後の患者へのインタビューによって、患者が隔離に伴って生じた心理的体験を明らかにする。
- 研究3) 隔離経験のある精神疾患患者であり、隔離から長い期間が経過した患者へのインタビューによって、隔離の経験を経た後の生活を送る中でのライフストーリーを明らかにする。

### 3. 研究の方法

#### 【研究1】

- 1) 目的：精神科病棟での隔離患者への看護を文献から抽出し明らかにすることによって、隔離患者への看護実践と研究の取り組みへの示唆を得る。

#### 2) 文献収集方法：

学術文献データベース医学中央雑誌 Web 版、PubMed を用いた。

医学中央雑誌 Web 版では、1983年～2020年12月までに掲載された学術文献を検索した。キーワードを「隔離」or「保護室」と共に、「精神科」AND「看護」で、絞り込み条件として原著文献を指定した。学術誌または大学紀要に掲載されている文献とし、商業誌、地方学会誌、学術集会誌、集録、会議録、協会誌は除外した。

PubMedでは、「nursing」or「care」or「practice」と共に、「Psychiatric」と「seclusion」をAND検索しタイトルに「seclusion」が入っていない文献を除外した。量的研究、文献研究の文献は除外した。

- 3) 分析方法：文献中で報告された看護実践をテキストデータに変換し、コード化した。その後、類似性と差異性を比較し、サブカテゴリー、カテゴリーへ抽象化した。

#### 【研究2】

- 1) 目的：精神科病棟で患者が隔離されたことに伴って生じた心理的体験を明らかにする。

#### 2) 方法：

研究参加者：精神科病棟に入院し隔離を経験した患者であり、隔離を経験したことを語る患者。

データ収集方法：半構成的インタビューで収集し、隔離開始後から解除までの間に感じたことを語ってもらう。

分析方法：質的帰納的研究デザインを用い、語りのデータをサブカテゴリー、カテゴリーへと集約していった。

#### 【研究3】

- 1) 目的：隔離経験のある精神疾患患者であり長い期間が経過した患者が隔離経験を経た後のライフストーリーを明らかにする。

#### 2) 方法：

研究参加者：隔離から長い年月が経過している患者であり、外来通院をしながら一般就労あるいは就労継続支援を受け1年以上定着している者であり、自身の経験を語る事ができる者である。

データ収集方法：半構成的インタビューで収集する。精神疾患を発症し、入院や隔離を

経てインタビュー時点に至るまでの間の生活について隔離期間を振り返りながら自由に語ってもらう。

Riessman のナラティブ研究法に基づき分析を行う。個々の事例の全体的な意味を理解した後、解釈のためのストーリーを見出す。語りの構造に着目し、テーマ的な意味を抽出する。

#### 4. 研究成果

##### 【研究 1】

医学中央雑誌 Web 版では抽出した 636 論文から除外基準に基づき、5 論文（調査対象国：いずれも日本国内）を抽出した。また、PubMed では 739 論文から 2 論文（調査対象国：1 件は日本、1 件は豪州）を抽出し、合計 7 論文を分析対象とした。

7 論文中、6 論文は看護師へのインタビューであり、うち 2 件は参加観察も併用していた。1 論文は参加観察のみの実施であった。

87 の看護介入を抽出し、13 サブカテゴリー、4 カテゴリーに集約した。（表 1）

行動制限は日本国内で多く行われている傾向にあることから、国内のフィールドを対象とした研究が多いと考えられた。また、国内の精神科病院では行動制限最小化委員会があるように、行動制限解除に向けて取り組むことが行われている。著しい精神症状を呈することによって行動制限となっていることを踏まえると、患者らしさを守る 患者との関係を構築する 患者の安全を確保する は行動制限解除に向けてより重要な実践である。

一方で行動制限は患者自身に対して精神的なトラウマを残すなどの弊害があると言われているが、文献レビューでは、患者がどのように体験しているのか明らかにできなかった。

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード
患者の安全を確保する	危険につなげない	持ち込み品を見極める 患者の安全を優先する
	病状を悪化させない	治療上不必要な刺激を取り除く 患者の脅威とならない距離的姿勢をとる
	訴えに真摯に対応する	頻回な訴えに真摯に対応する 心根を汲みとり理解を示す
患者との関係を構築する	患者と共に時間を過ごす	患者の興味・関心をコミュニケーションに用いる シンプルなケアを通して関係を確立し、ニーズを引き出す
	看護師の気持ちを伝える	患者の良いところをみとめる いたわりの言葉をかける
	不安を抱かせない	状況を説明する 薬の効能と休息の必要性を伝える
患者らしさを守る	主体性を尊重する	患者の希望を尊重する 限界はあっても出来る限り患者の要望を叶えようとする
	患者の立場に立つ	トラウマ体験を考慮し寄り添う 施設された保護室にいる患者の目で物事を見る
	基本的な生活を重視する	普段の生活リズムに近づける 複数の看護師で頻回に入室し、食事やトイレ、服薬の援助を行う
行動制限解除に向けて取り組む	行動制限や治療の説明を行う	患者に隔離環境の治療的意味を説明する 何が起きているか説明する
	解除に向けて患者と話し合う	行動制限緩和に向けた治療計画を患者と共有する よい行動を称賛する
	隔離以外の手段を試みる	回復段階に応じて開放観察エリアを選択する 試行的に低刺激エリアで反応をみる
	患者の病状を把握する	患者の行動を見守る 複数の看護師で頻回に入室し病状をみる

表 1 精神科病棟の行動制限患者への看護実践

##### 【研究 2】

研究参加者は 2 精神科病院に入院している 9 名、診断は統合失調症が 5 名、感情障害が 2 名、急性一過性精神障害と ADHD が 1 名ずつであった。年齢は 20～80 歳代、性別は男性 6 名、女性 3 名であった。

以下、カテゴリーは【】、サブカテゴリーは〔〕で示す。精神科病棟で隔離された患者は、隔離開始と共に、【混沌の状態】に陥る。これは〔否認〕〔鬱積〕〔猜疑〕で構成された。そして【手当たり次第にもがく】がみられた。これは〔自問自答〕〔錯綜〕〔反感〕で構成された。このような中で、答えが見つけれず【希望を失う】があった。このような否定的な感情・認識を抱く中で【先が開ける】心理的体験もあった。さらに、自身を内省できるようになり、援助者に対する感謝も感じるなど【軌道にのる】。これは〔我に返る〕〔回生〕によって構成された。そして、隔離が続かないように、周囲の求めるように自分自身を見せかける【取り繕う】心理的体験をしていた。

精神科病棟での隔離に伴い、患者は自分自身で対処する術がない中で否定的な心理的体験をしていたが、これらは隔離が必要となるほどの精神疾患の増悪期にあらわれる症状に併せて辛

いものとして患者は捉えていた。一方で、症状が軽減することで看護師の援助も認識できるようになってくることから、看護師は日常生活の援助を行う中で、患者の症状が治療に伴って軽減する状況を捉え、解除に向け援助する必要性があると考えられた。

### 【研究3】

研究参加者は2名であり、いずれも統合失調症で、50歳代であった。性別は男性1名(A氏)、女性1名(B氏)であった。

#### 1) A氏のライフストーリー

A氏は18歳時に統合失調症を発症し、初回入院と隔離を経験。退院後も複数回の入院隔離を経験している。1990年代後半の入院を最後に、妻と2人暮らし、娘は嫁いでいる。早朝の仕事で生計を立て、昼は地域活動支援センターに通所している。

A氏には隔離経験を経て人生を歩む中で7つのテーマがあった。自らが病気であると理解できない中、初めての隔離となり「暗闇の中にポンと入れられた」、「看護師が注射器を持って5、6人、俺の上に乗って青酸カリを打たれて死んだと思った」等による恐怖の世界に迷い込む、「人間の屑だとミカンを投げられ、これが精神科かと思った」、「屑、おまえら生きとるだけで十分と言われた」等、隔離中にスタッフから浴びせられる言葉によって自分を軽蔑する、退院後すぐに「暴走族するわ。生活態度も悪いし」、「どこでも遊んでいた。旗振りしていた」等による自暴自棄、二度目以降の隔離の際に自殺を図るものの蠅が飛んでいるのを見て「蠅が生きているなら俺も生きないといけないな」と思うなど流れに身を任せる、20代で同じく精神障がいのある妻と結婚後、産婦人科の医師から言われた心ない一言に抗議し妻を守ったり、子供を抱き上げた際に吐き出したミルクが口に入り「お父さんになったんだわ」と思うなど生きる意味を見つける、「帰るのが夜の11時半とか。160時間働いて、160時間残業していた」、「新聞配達を朝の2時からしている」等、家庭を守るための無我夢中、「家内に聞くと、お父さんが救ってくれたから信じてるからね。同じ病で良かった」等達成感であった。

#### 2) B氏のライフストーリー

B氏は50歳代女性。定時制高校に通っていた10歳代後半に統合失調症を発症し初回入院、その後の再入院で隔離を経験している。入院隔離は、インタビュー時の数年前を最後に複数回あった。隔離室に入室していた際に出会った夫と結婚後の現在は、二人暮らしで就労継続支援と、デイケア通所を併用している。

B氏には隔離経験を経て人生を歩む中で4つのテーマがあった。統合失調症を発症し精神科病院に初めて入院、退院後は家族の監視下で療養する中で病状が悪化し「どこだここはと衝撃的なイメージがあった」、「ウサギちゃんのような暗闇の時期」等による暗闇に入る、就職し生活する中で入院中に出会った彼氏と出会い「彼は暗闇から引き出してくれた」と感じ結婚し子どもを設けるようになり暗闇から抜け出す、症状が悪化し自宅で暴力的言動を振る舞った際に義母は何も言わず「いいところに嫁がせてもらった」と感じ、隔離室について「眠れなくなった時には入れてほしかった」等安心感を得る、「怖い思いをしていた時、あの状態じゃ一般(病室)じゃ過ごせないと思います」、「隔離室はないといけない部屋ですね」等隔離室の必要性を悟るであった。

#### 3) 考察

隔離経験のある精神疾患患者である両氏は、隔離から長い期間が経過してからもありありと隔離時の体験を語っていた。A氏は発症初期の頃に経験した繰り返す入院隔離を不快と感じ、自己コントロール感をもてずに長期を経ていた。一方のB氏は隔離室の不快感を自身の家庭と重ね合わせており、安心できる家庭に身を置く中で、隔離を保護的な機能と感じていた。初期の隔離体験に対して、自らの価値を認識できるよう支援の必要性があると共に、中長期的には生活環境に着目した支援の必要性が考えられた。

本研究によって、精神科病棟において他害行為を理由として隔離となった患者は、隔離によって否定的な心理的体験をしていると共に、長期にわたって人生に影響を与えていることが明らかとなった。また実際に行われていた看護師の援助は、患者の語りによって明確化できるものはなかった。これらのことより、患者の安楽に向けた看護においては、隔離に対する患者の思いや認識を表出してもらうことが足がかりとなるになると考えられた。本研究で得られた患者の語りを活用し、看護のあり方を示した実践事例集を作成した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 日野雅洋, 石橋照子, 大森眞澄
2. 発表標題 精神科病棟での行動制限患者への看護についての文献検討
3. 学会等名 日本看護研究学会第48回学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 日野雅洋, 石橋照子, 大森眞澄
2. 発表標題 隔離経験をもつ精神障がい者A氏のライフストーリー
3. 学会等名 第43回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 日野雅洋, 石橋照子, 大森眞澄
2. 発表標題 精神障がい者B氏の隔離体験の意味づけの変化
3. 学会等名 日本精神保健看護学会第34回学術集会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------